

現代短歌分類辭典

第二十六卷

津端修編纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第 二 十 六 卷

現代短歌分類辞典

26

昭和四十六年七月十五日発行

定価五五〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 修

〒164

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所 津 端 修

振替 東京 六七三四一番
電話 三八七局八四二九番

凡 例

- 一、明治、大正、昭和三代に詠まれた歌三十五万八千首を分類した。
- 一、分類の基準は単語を中心とし、単語には、ことごとく品詞名をつけた。
- 一、単語の排列は、五十音順に従った。
- 一、序文集は第十二巻にある。
- 一、歌は原作の仮名遣いにしたが、初版本に拠る方針をとった。
- 一、歌の下にある記号は歌集名の略符号である。
- 一、単語の説明は、新仮名遣いに従った。

目

次(第二十六卷)

あはれ⑩(結句止)	歌数	六三	一	あはれがりをり	一〇三
同 ⑪(五句中間切)	三六	二	二	あはれがりをれーば	二〇三
同 ⑫(二つあるもの)	二	二	二	哀れがる(連体形)	二〇三
あはれーあはれ	七	二	二	同 (終止形)	二〇三
あはれーあはれーあはれ	一	一	一	あはれがるーなり	一〇三
あばれ馬	一	一	一	あはれげな	一〇三
あはれがらーれーつつ	一	一	一	あはれげに	一〇三
あはれがらーれーて	一	一	一	哀れさ	二〇三
あはれがり	二〇	一	一	あばれ酒	二〇三
あはれがりーけり	二	一	一	あばれ酒する	二〇三
あはれがりーける	一	一	一	逢はーれーざる	二〇三
あはれがりーつつ	一五	一	一	あばれーし	二〇三
あはれがりーみーつ	一	一	一	あはーれーず	二〇三
あはれがりゆく	二	一	一	憐れだ	二〇三
あはれがりゐる	一	一	一	哀堂	二〇三

一八一
一八二
一八三
//
二一四
二二五
二二七
二三一
//
二三三
//
二三四
二三五
//

あはれなれ―ば
 あはれなれ―や
 哀れに
 あはれに―し
 哀れに―ぞ
 哀れに―も
 逢は―れ―ぬ
 哀れの
 あはれび
 あはれび―たまふ
 あはれぶ
 あはれふかく
 あはれま―ざら―む
 憐れます
 憐ま―ず
 あはれませ

二 一 二 一 一 一 一 二 二 二 二 二 一 一 二

二六 憐れま―む①
 同 ②
 憐れま―る
 二五 憐ま―るる
 〃 憐ま―れ
 二五 憐ま―れ―くる
 二五 あはれま―れ―ける
 二五 哀れま―れ―つつ
 二六 憐れま―れ―て
 二七 憐れま―れ―ゐる
 〃 憐ま―ん
 〃 あはれみ〔名詞〕
 〃 同 〔動詞〕
 二六 あはれみあひ―ぬ
 〃 あはれみ―き
 〃 あはれみくれよ
 二六 あはれみ―ける

二 三 三 一 二 一 一 一 二 二 一 一 一 一

二六 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五

あはれみ心
 あはれみし
 あはれみそめし
 憐み給ふ①
 同 ②
 憐みたまへ
 あはれみつ
 哀れみつ
 憐みて
 憐みながら
 あはれみなさるよな
 あはれみにけむ
 憐れみにけり
 あはれみにつつ
 憐みぬ
 あはれみぬべし
 憐れみます

一 五 一 二 一 三 二 二 四 三 一 一 四 四 二 一

二六 憐れみ居れば
 〃 逢はれむ
 二七 憐れむ〔終止形〕
 〃 同 〔連体形〕
 〃 あはれむ如き
 〃 憐むごとく
 二八 あはれむごとし
 二九 あはれむなかれ
 三〇 憐むべき
 三一 憐むべし
 〃 あはれむや
 二六 あはれむらしき
 〃 あはれめ
 二八 あはれめど
 〃 あはれめば
 〃 あはれめや
 二九 あはれめよ

一 三 六 二 二 二 一 二 三 六 六 三 一

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 二九 二九 二六 〃 〃 二九

あはれめーり
あはれめーる
あはれーや
あばれる
あばれろ
憐んーで
粟稈
阿波踊
逢はーん①
同 ②
逢はーんーか
間（あひ）
逢ひ（名詞）
合計

三、八〇八
五三 二九 二 二〇 一九 一 一 一 一 一 一四 一 三

三〇三 三〇五 三〇七 〃 三〇八 〃 〃 〃 〃 〃 三〇九 三一 三二〇

あはれ^⑩【感動詞】

幼稚園の童等^{こどもら}にしあらむ輪をなして骨となり居り掌をつなぎあはれ 高木 今衛

枝紅き灌木にゐて朝日子に高鳴く春のみそさざいあはれ 前田 夕暮

F四二型戦闘機のガラッセル・エム・チャーケチウイといふ青年士官のあはれ^⑪

前田 夕暮

起いでて顔をあらひに行く人のくしゃめをやめず廊とほるあはれ^① 前川 佐美雄

おく山の馬柵戸に咲けば合歓のはな人もくぐらん花の下あはれ^② 中村 憲吉

おさるれば何処までもへこみ終るときこの雑沓のわが腹あはれ^⑥ 土岐 善麿

押入のふすまにいたく飛びあたり畳に落ちし夜の蟬あはれ^① 岡野 直七郎

恐ろしき淵のまはりを海雀光り列なめ飛び居りあはれ^② 北原 白秋

おちつきて見ればまことに庭の樹の芽ぶかぬぞなきむきむきにあはれ^① 臼井 大翼

落つきてよくぞ書きしと再びをよみかへす文さにあらずあはれ^④ 高橋 英子

あはれ^⑩

あはれ⑩

落ちまさる紅葉の山の下露に濡るるけものもあらむかあはれ⑦

驚きてつと角退きし蝸牛かたつむりまたつくづくと葉に触さるあはれ

おどろなる草のしげりの暑きときわれの心のなぎつつ哀れ④

哀ふるいのちとどむと朝々をとく起きいでて水浴ぶるあはれ⑬

おのころ島国内の土を火にやきて霜と凝りたる剣太刀あはれ⑨

おのづから別と知れど言に出でず涙たたへし娘この眼まなこあはれ

おのれひとり命全けむひたすらのたのみ空しきあがきぞあはれ④

おほおほと春の巷の曇りつつ塵つかれの労といふ言葉あはれ

大川の水の面にかずしれず浮かぶかばねに日の照るあはれ

大きな家にひとり留守ある昼の雨ぬれゆく庭に鳳仙花あはれ③

大君しみづから立たし槌とりて鍛へたまひし大御太刀あはれ⑤

大空を鳥行きしかばひよこらの相いましむる諸声あはれ④

尾上柴舟

北原白秋

佐藤佐太郎

若山牧水

太田水穂

小泉芑三

小宮良太郎

柴生田稔

藤沢古実

中村憲吉

尾山篤二郎

島木赤彦

大水のたびごときれて村人の馬鹿土堤とよぶこの土堤あはれ①

五十嵐秀明

思ひ出で今日も歎きてあるならむかくとも知らぬ仇びとあはれ②

吉井 勇

おもひわびここに追ひ来てあら磯にあか児を生みし友の妻あはれ③

土岐善麿

親牛の乳をしぼらんと朝行けば飢ゑて人呼ぶ牛の子あはれ④

正岡子規

親さびて子をもる眼つきおのづから母となりにし親心あはれ⑤

橋田東声

親雞の腹の下よりつぎつぎに顔現るるひよこらあはれ⑥

島木赤彦

おや船の笛に応へて子船等のふえ鳴らしつつ引く水脈あはれ⑦

高橋幸之助

海峡をわたる出雲の明烏伯耆の浜にあつまるあはれ⑧

能海紫星

海神の森にさわぎしむら鴉いま大空にあつまるあはれ⑨

橋田東声

海洋の西洋木版画帆船描き地球の円き孤線があはれ⑩

北原白秋

格子戸を開けてまた閉ちとつおいつためらふ男光^{つや}やかにあはれ⑪

岡野直七郎

かかる家に嫁ぎしゆゑに不孝者のわが親となれるわが母をあはれ⑫

前川佐美雄

あはれ⑩

あはれ⑩

かぎろひの夕さりくれば栖に並び鶏のつがひも船の上にあはれ②

学校にゆくこともなくあきなひてこの子らがもつ商才あはれ②

隠しもちてたまたま独りもの食めりこどもにかへるおほ母あはれ

かく近く聞かむものかも驚はわれのうしろに啼きつつあはれ⑭

影多さばに瘤ある駱駝膝は折りいづ方となき上眼してあはれ⑦

かけし手のすでに極まると見えし子が力あまりし負相模あはれ①

傾ぎ来てわが風絲にかかりたるひとつの風がへらへらとあはれ①

柏の葉摘むとわが来し丘のべの風いまださむく身にしむあはれ③

春日野の浅茅も枯れてさ牡鹿の今は冬辺と角なしにあはれ

春日野の杉のした草うら枯れてたえだえ鳴ける虫のこゑあはれ

濃霧がすたちて忽ち暗む雪溪に間近き友と呼び合ふあはれ

風を見る黒き鵜あまた騒さわめくを檜綱搔き集め夕出立ゆふでたつあはれ⑪

島木赤彦

相良義重

酒井広治

斎藤茂吉

北原白秋

臼井大翼

中村正爾

相馬御風

井上真一

小泉 蓼三

志摩三奇雄

北原白秋

かそかなる谿川の音天にかよふこの峠路の吾木香あはれ

花岡謙二

かたくりの花をもとめむ吾ならず山のたをりににほへるあはれ⁽¹⁴⁾

斎藤茂吉

片手にて道ゆきずりに草結ぶ世々のつたへをいま見るあはれ⁽²⁾

高田浪吉

片照の日に並みたてる木の間ゆく毛なみよこれし生きものよあはれ⁽⁶⁾

前田夕暮

葛飾の古江の水に根を延へていまも咲きつぐ芹の花あはれ⁽⁴⁾

太田水穂

金網のなかのひなたに虱とる鷺の嘴きたなしあはれ⁽¹⁾

中島哀浪

金網のをりのなかなるあらわしの空うちあふぎかがなくあはれ⁽²⁾

長塚節

必ずと期せば命は無きものを佐佐木の四郎高綱あはれ⁽⁵⁾

窪田空穂

かにかくに朝夕いたたく名ばかりの青菜まじりの薄粥あはれ⁽¹⁾

中村正爾

蟹沢の寒く凍りし日のなごり集り死にしすなめのあはれ⁽⁸⁾

土屋文明

かの見ゆる砂丘の鄂博^{おぼ}に手向して曠野越すらむ旅人あはれ⁽⁵⁾

川田順

河狩に野狩りにいでて大君しあともひましし御軍あはれ⁽⁵⁾

尾山篤二郎

あはれ⁽¹⁰⁾

あはれ⑩

河岸の柳のかげにたたずみてものを思へる舞姫あはれ④

屍室の明るき昼をその父のうつらうつらと居眠るあはれ

峽の空うづめて黒き夕鴉素枯れの一樹にあつまるあはれ

峽ふかく日は暮れたれど田にはまだ人居て打てる鍬影あはれ③

かぶりつく柿のあたまの歯にあまり開きし口の動かぬあはれ⑩

壁近くかけたる軸は見ましつつ絵はおぼろとぞのたまふあはれ

帰りつくこも旅なる宿ながらさすがにしもぞ落付くあはれ⑨

かへるでに風温ぬくき夜を起き出でて烏を真似るをさな子のあはれ③

墓股かへるまたに斗組にさやに光り映ゆる花の螺鈿の宝相花があはれ①

蟪蛄のはらわた頼めすち黒き針金虫の生くらくあはれ⑤

鎌倉のいくさの君も惜しけれど金槐集の歌のぬしあはれ①

鎌倉のきびしくうごく代にありて殺されし君うたびとにあはれ⑨

吉井 勇

菊池 剣

松本千代二

中村 憲吉

太田 水穂

若林 牧春

太田 水穂

宮 終二

中村 正爾

北原 白秋

正岡 子規

斎藤 茂吉

上内は谷をへだつる前の山肥後と筑後の境松あはれ⑦

北原白秋

蚊帳に鳴く虫に眼を凝らす童子のおとがひ白くてひよめくあはれ⑤

若山喜志子

から国のから国びとも漢文字の見えざるありて言問ふあはれ①

川浪磐根

鴉啼く谷間の森に入りゆきて水を浴みけむ自が心あはれ④

島木赤彦

狩人の笛とも知らで谷川を鳴き鳴きわたる小男鹿あはれ①

正岡子規

刈りこみて春は埒なき無花果のぬめらに光る木ぶりがあはれ①

中村正爾

かりそめのいたづきと思ひ来しならむ耳鼻科病室に死にし子あはれ④

大坪正義

枯芝に枯芝いろの蝶ひとつやすらふほどの日の光あはれ

北原白秋

寒椿一輪咲ける花かげにひそむ蕾のをさなさあはれ

若林牧春

丘陵の低くなだれてよこたふを道ひとすちに白きもあはれ⑧

斎藤茂吉

木々の上を光り消えゆく鳥のかず遠空の中にあつまるあはれ③

北原白秋

菊池一族が戦ひて勝ちまた破れつつ都に遠く住みし跡あはれ③

竹尾忠吉

あはれ⑩

あはれ⑩

聞くものの四辺になけれ谷がはにひとりごちたる吾が言あはれ④

中村憲吉

汽車の窓に逢ひしたまゆらものを言ふ吾が子の顔に髭のびて哀れ②

久保田不二子

軋りつつ電車はまがる道の角に立ちて見送りしその姿あはれ①

花田比露思

きずつけるころのまどひめにしるくことばにしるしなんぢよあはれ⑦安江不空

北寒く吹きかへしけり雨しきり松の緑と梅の花とあはれ①

蕨真

木の枝に雀ひとつら一列ならびゐてひとつびとつにものいふあはれ②

北原白秋

吉備彦が思ひやさしく摘みけらし藪萱草のうまからぬあはれ③

吉野秀雄

君を看に往かんと思ひ果さぬうち早亡しと云ふ新聞紙しんぶんあはれ⑧

尾山篤二郎

興がりて宿駅うまやの児らがをちこちの軒に追詰むる迷ひ牛あはれ⑤

中村憲吉

清正は秀吉の家来と教ふれどとても納得のならぬ子ろあはれ①

前川佐美雄

嫌はれて蹴られたとも知らぬ猫の子の泣いてかへるよこれまたあはれ①前川佐美雄

きれながのとぢし眼のほのぼのとひらくをおもふ親ところあはれ⑥

前田夕暮